

国スタジアム

8日(月)

大会 競技

陸上日本インカレ

OUHS  
OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES  
スポーツ

大体育大

第44号  
発行責任者  
大阪体育大学広報室  
室長 大坪 康巳  
編集長 大坪 康巳  
大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1  
電話 (072) 453-7021  
FAX (072) 453-8818  
協力=教育後援会・学友会

陸上競技部

第94回日本学生陸上対校選手権大会

陸上競技の第94回日本学生対校選手権大会が6月5・8日、岡山市で行われ、陸上競技部は十種競技で山本湧斗(体育3年、兵庫・明石商業)が自己ベストを大幅に更新する73.19点で2位。女子砲丸投げで中原鈴(同、東大阪大学敬愛)が14.67で3位となり、ともに表彰台に立った。

# 十種 表彰台 山本2位 砲丸 中原3位

## 未体験の「ゾーン」に入り自己新

スポーツ心理学では、アスリートが極度に集中し、最高のパフォーマンスを自然に発揮できる心理状態を「ゾーン」と呼ぶ。  
山本は「自分は確かに経験していたこのゾーンに入っていた」と10種目を闊った2日間を振り返る。  
「自分の中で『行け』という意識がどんどん湧いてきたのだ」という。  
この気持ちは、6月6日、1種目の1000mをいきなり自己ベストの10秒88で走ってから生まれた。2種目の走り幅跳びも、追い風参考ながら7.44の自己ベストと

なった。5種目の400mも自己ベストだった。一晩経ってもゾーンは抜けず、翌7日も2種目はやや苦手だったが、自己ベスト。3種目の得意の棒高跳びではベストを出したが4.90で圧勝すると、苦手だったはずの4種目のやり投げで自己ベスト。開始は午後9時13分にずれ込んだ最後の1500mも自己ベスト。



十種競技を終えた山本(左)。右は16位の太田大・三和龍之介(体育学部3年、兵庫・社)

## ライバルで友人の後輩と切磋琢磨

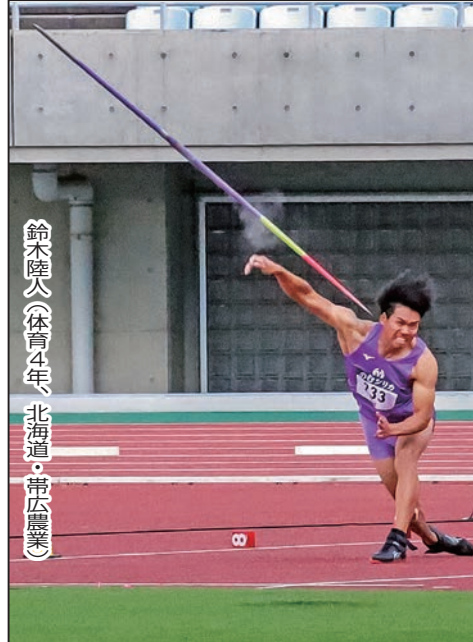
大阪体育大学から3人が出場した女子砲丸投げ。中原は、4月の日本学生個人選手権でいきなり2位に入った「スーパー年生」の坂村はる(スポーツ科学、大阪体育大学浪商)に競り勝った。「全国大会で初めて表彰台に立てたうれしい気持ちはあるが、自己ベストに1つ届かなかった」とさらなる飛躍を目指す。



## 計7人入賞

日本インカレでは、男子は砲丸投げで黒田翔貴(大学院博士前期課程2年、兵庫・伊川谷北)が16.24で4位、やり投げで須藤勇大(体育4年、群馬・前橋育英)が8.93で7位、

位。女子は砲丸投げで坂村はるが14.67で4位、ハンマー投げで川島空(体育3年、大阪体育大学浪商)が57.67で6位、やり投げで川合小想(体育4年、三重・松阪商業)が51.68で8位。表彰台の2人のほか、5人が入賞。対校得点の女子フィールドは15点で、関西勢としてトップの5位だった。



鈴木陸人（体育4年、北海道・帯広農大）



湯浅可枝（大学院博士前期課程）



黒田翔貴（大学院博士前期課程）

陸上競技部は4月に神奈川県平塚市で開催された日本学生個人選手権大会で2種目で表彰台に立った。5月に大阪市で行われた第102回関西学生対校選手権大会は、男女砲丸投げで優勝するなど延べ11人が表彰台に立ち、対校得点ではフィールド得点で男女とも1位となった。

日本学生個人で鮮烈なデビューを飾ったのは、1年生の坂はる（スポーツ科学、大阪体育大学浪商）。女子砲丸投げで、自新記録で関西学生新記録となる16.34をマークして1位。高校3年だった昨年、日本陸上競技選手権で実業団、大学選手と競って8位入賞した地力を見せた。

関西学生でも、坂はるは60で優勝し、中原鈴（体育3年、東大阪大学敬愛）、武田光里（同、奈良・添上）と1〜3位を独占した。

また、男子砲丸投げの黒田翔貴（大学院博士前期課程）も日本学生個人で16.52の自己新で3位入り、関西学生ではこの記録を更新し16.65で優勝した。

関西学生ではこのほか、男子やり投げで連覇を狙った須藤勇大（体育4年、群馬・前橋育英）は最終6投目で71.37をマークして逆転トップに立ったが、直後に再転転されて惜しい位。ハンマー投げの湯浅可枝（大学院博士前期課程）は55.65、十種競技の山本湧斗（体育3年、兵庫・明石商業）も70.64点で2位。1500mの吉山誠（体育3年、大阪・大塚）はランニング（資格記録）は15番目だったが、ラストの直線で追い上げ、自己ベストの3分54秒72で3位に食い込んだ。女子は砲丸投げ2位の中原が、二刀流で円盤投げでも2位。ハンマー投げで藤田唯愛（スポーツ科学2年、三重・松阪商業）が54.21で2位、やり投げで川台小想（体育4年、松阪商業）が51.45の自己ベストをマークし、2年連続の3位となった。



吉山誠（体育3年、大阪・大塚）

陸上競技部は4月に神奈川県平塚市で開催された日本学生個人選手権大会で2種目で表彰台に立った。5月に大阪市で行われた第102回関西学生対校選手権大会は、男女砲丸投げで優勝するなど延べ11人が表彰台に立ち、対校得点ではフィールド得点で男女とも1位となった。



坂はる（スポーツ科学1年、大阪体育大学浪商）

関西学生ではこのほか、男子やり投げで連覇を狙った須藤勇大（体育4年、群馬・前橋育英）は最終6投目で71.37をマークして逆転トップに立ったが、直後に再転転されて惜しい位。ハンマー投げの湯浅可枝（大学院博士前期課程）は55.65、十種競技の山本湧斗（体育3年、兵庫・明石商業）も70.64点で2位。1500mの吉山誠（体育3年、大阪・大塚）はランニング（資格記録）は15番目だったが、ラストの直線で追い上げ、自己ベストの3分54秒72で3位に食い込んだ。女子は砲丸投げ2位の中原が、二刀流で円盤投げでも2位。ハンマー投げで藤田唯愛（スポーツ科学2年、三重・松阪商業）が54.21で2位、やり投げで川台小想（体育4年、松阪商業）が51.45の自己ベストをマークし、2年連続の3位となった。

◆日本学生陸上競技個人選手権大会（4月25〜27日、神奈川県・相模原市）

【男子】砲丸投げ ①坂はる（16.34）②黒田翔貴（16.52）③山本湧斗（16.52）④須藤勇大（16.52）⑤内山大祐（16.52）⑥山本湧斗（16.52）⑦三和龍之介（16.52）⑧山本湧斗（16.52）⑨山本湧斗（16.52）⑩山本湧斗（16.52）

【女子】砲丸投げ ①湯浅可枝（55.65）②湯浅可枝（55.65）③湯浅可枝（55.65）④湯浅可枝（55.65）⑤湯浅可枝（55.65）⑥湯浅可枝（55.65）⑦湯浅可枝（55.65）⑧湯浅可枝（55.65）⑨湯浅可枝（55.65）⑩湯浅可枝（55.65）



湯浅可枝（大学院博士前期課程）

## レセプション強化に手応え 秋の1部復帰向け攻撃磨く



太田花菜（スポーツ科学1年、岡山・山陽学園）

関西大学バレーボール部男子は1部に昇格した4〜5月の関西大学春季リーグで11位。2部降格が決まったが、沼田薫監督は課題だったレセプション（サーブレシーブ）の向上を「大きな成果」と評価する。

1部昇格だった昨年、率7位に入った。リベロの山本泰地（スポーツ科学2年、滋賀近江）はブロックディグのフォーメーションで的確に指を出し、チームを率えた。

攻撃面は、アタック決定率で最下位に終わり課題を残したが、素早い動きの祝所光（体育4年、石川県立工業、パ）は、最後まで点を切り取る練習に力を入れている。



祝所光（体育4年、石川県立工業）

バレーボール部男子は1部に昇格した4〜5月の関西大学春季リーグで11位。2部降格が決まったが、沼田薫監督は課題だったレセプション（サーブレシーブ）の向上を「大きな成果」と評価する。

1部昇格だった昨年、率7位に入った。リベロの山本泰地（スポーツ科学2年、滋賀近江）はブロックディグのフォーメーションで的確に指を出し、チームを率えた。

攻撃面は、アタック決定率で最下位に終わり課題を残したが、素早い動きの祝所光（体育4年、石川県立工業、パ）は、最後まで点を切り取る練習に力を入れている。



宇吉凛々花（スポーツ科学1年、誠修）



徳永優奈（体育4年、福岡・誠修）



高倉快周（体育3年、京都府・開成）



松浦和貴（体育4年、岩手・南宮）

バレーボール部男子は4〜5月の関西大学春季リーグ1部を5勝6敗、7位で終えた。6月の西日本大学バレーボール大会女子選手権大会で1〜2で敗れた。長江晃監督は「最終戦は部の歴史でも記憶にない1年生4人が出場し、未完成のチームだが、伸びしろは他大学以上にある」と秋に向けた成長を期待する。

バレーボール部男子は4〜5月の関西大学春季リーグ1部を5勝6敗、7位で終えた。6月の西日本大学バレーボール大会女子選手権大会で1〜2で敗れた。長江晃監督は「最終戦は部の歴史でも記憶にない1年生4人が出場し、未完成のチームだが、伸びしろは他大学以上にある」と秋に向けた成長を期待する。

バレーボール部男子は4〜5月の関西大学春季リーグ1部を5勝6敗、7位で終えた。6月の西日本大学バレーボール大会女子選手権大会で1〜2で敗れた。長江晃監督は「最終戦は部の歴史でも記憶にない1年生4人が出場し、未完成のチームだが、伸びしろは他大学以上にある」と秋に向けた成長を期待する。

バレーボール部男子は4〜5月の関西大学春季リーグ1部を5勝6敗、7位で終えた。6月の西日本大学バレーボール大会女子選手権大会で1〜2で敗れた。長江晃監督は「最終戦は部の歴史でも記憶にない1年生4人が出場し、未完成のチームだが、伸びしろは他大学以上にある」と秋に向けた成長を期待する。



# V85 今季テーマは 「泥臭く」



下川真良監督は優勝を評価したうえで、GKとDの連携を課題に挙げる。39対39で引き分けた大阪経済大学戦、33対37で敗れた関西学院大学戦はGKのセーブ率が10%台にとどまり、センターバック・ポストGKをつなぐセンターラインが有効に機能しなかった。8月の西日本学生選手権に向けて、GKは上

対的エースはいない。下川監督は「言外でハンドをしない」と勝ちあがれない」と断言する。今季のテーマは「泥臭く」。ボールが転がったら体を張って取りに行く。相手が

**ハンドボール部 男子**  
関西学生ハンドボール春季リーグ  
ハンドボール部男子は4～5月の関西学生春季リーグを7勝1敗1分で終え、2季連続85回目の優勝。最優秀選手に橘光太郎（体育3年、大阪体育大学浪商）、優秀選手に竹下颯斗（同）、下川陽向（体育4年、同）が選ばれた。

生、2年生も含め、激しく競わせた方針だ。  
男子ジュニア世界選手権に出場するU21日本代表に竹下、橘、堀洗志郎（体育3年、高知中央）が選ばれた。センターバックの竹下は負けん気の強い司令塔リーダーシップがあり、レフウィングの橘は世界大会の経験も豊富なディフェンシブリーダーで、サイドシュートの精度も上がってきた。レフバックの堀はシューターとして球の速さ、威力は一級品。4年生の下川らとともにチームの要だ。  
昨年の全日本インカレはエースの荒瀬廉（豊田合成ブルーファルコン名古屋）を擁し優勝したが、今年、絶



本ビューストーンデビューから4年生が多数卒業して主力が入り替わったこと、一方で1年生15人のうち即戦力として期待できる新人が多かったことが理由だ。  
1年生は、177センチと大柄だが器用さも兼ね備える加藤（同・山・高水）らが出場した。

大抵大とは逆に、昨年のインカレ優勝の筑波大学など、関西勢は、昨年の主力がほぼ残った。橘本監督は「今年は例年以上に追いかけられる立場」として、インカレ優勝というチームの目標がぶれることなく、頂点を目指す」と意気込みを語っている。

真央（スポーツ科学、千葉・昭和学院・オールラウンダー）の松本優萌（同・東京・佼成学園女子）、中村真心（同・昭和学院）、GKの尾崎羽南（同・山・高水）らが出場した。

が楠本繁生監督が挙げるのは、GKの比嘉嘉樹（体育4年、沖繩・那覇西）。「守りの軸であり、速い球出しから速攻の起点にもなる」と語る。

さらに、4年生の尾関菜穂（体育、昭和学院）、坂本碧（同・富山・高岡向陵）、奥山紗彩（同・大阪・四天王寺）らが主力となる。昨年、アキレス腱断裂でインカレに出場できなかった高来美菜（同・石川・小松商業）が復帰。一方でその代役を務めた小林果杜（同・四天王寺）もインカレを機に急成長した。

全関西学生ハンドボール春季リーグ  
22季連続V！  
戦い方替え選手絞る



4月の第52回関西学生選手権大会は、3回戦で準優勝した大連大に、6月の第76回西日本学生選手権大会も3回戦で、昨年のインカレ4強の多摩学院大学に敗れた。下

級生中心の試合となったが、まずまずの手応えを得た。昨年はPリヴァースが、

（体育3年、大阪・藤井寺）、SG竹内連（体育4年、北海道・東海大学付属札幌）のけがが大変響いたが、今年はその2人が万全だ。身長190センチのリヴァースはインサイドの要。縦に攻めるスピードは関西学生屈指だ。竹内はスピードとフィジカルの強さが魅力で、本音が目指す守備からの速攻、ファーストプレーで先陣を切る。

## リヴァース、竹内復帰 勝負の秋に向け手応え



## 5連覇逃し悔しい春 ピークは勝負の秋に



チームは常に日本一を掲げ、秋の全日本インカレで13年ぶり3回目の頂点を目指す。2年前の第1回新人インカレで全国優勝したメンバーはチームの軸の3、4年生となった。村上監督は「春は悔しい結果になったが、勝負の秋にピークを持つていきたい」と意気込みを語っている。

チームは常に日本一を掲げ、秋の全日本インカレで13年ぶり3回目の頂点を目指す。2年前の第1回新人インカレで全国優勝したメンバーはチームの軸の3、4年生となった。村上監督は「春は悔しい結果になったが、勝負の秋にピークを持つていきたい」と意気込みを語っている。

ユース・ネーションズリーグ日本代表、韓国大会の日本学生選抜に連続して選ばれた。ゲームリーダーの升田木花（体育4年、福岡八幡宮）は頼れるシューターで、全関西優秀選手賞を獲得。1年生の大沼奈奈（スポーツ科学、京都府立）は果敢に攻めて新人賞を獲得した。

6月の西日本学生選手権大会は大半の4年生を教育実習で欠き、優勝した日本経済大学に72対78で敗れ、ベスト8だった。

全関西学生ハンドボール春季リーグ  
22季連続V！  
戦い方替え選手絞る

バスケットボール部女子は4～5月の第46回全関西学生女子選手権大会から連覇を逃がし、4位。主手の三沢真歩（体育3年、広島皆実）、アイエドゥン・グレイス（体育3年、岡山・倉敷聖光）がけがなどで終盤まで欠けた影響が大きかった。村上なおみ監督は「ありえない結果だが、多くの選手に経験を積ませる」と話した。

シャイン（ベッツ）に頼りすぎた反省し、今季は全関西のフロンティアキャンプから、多数の選手による競争を日高ひかる（トヨタ紡織サン

か、個々の選手の良さを引き出して、のがチームの持ち味だ。三沢は高い得点力に加えて、対人強、3×3

2008年北京五輪銀メダリストの日本レスリング協会強化委員で元日本体育大学助教、湯元健一さんが4月、レスリング部監督に就任した。

湯元さんは、和歌県出身。バリ五輪では日本男子の樋口黎選手（57歳）級・清岡幸太郎選手（65歳級）を金メダルに導いた。レスリング部は、阪国体育大学浪商中学・高校のレスリング部とともに関大一貫の指導体制をとり、高校で体育館で、合同で練習していた。1984年ロサンゼルス五輪で石森玄一選手が7位に入ったが、以後、五輪選手は輩出していない。

湯元さんは本学へ移籍した理由は「中高の一貫指導は日本では他にない魅力。ナショナルチームとして得た世界のトレンドや新しい技術、世界で勝つレス

リングを中学・高校、大学の選手に教えたい」と語る。全日本ウィースタイルコートの兼務のかたなちで大体大の監督に就任したレスリング部ゼネラルマネージャの姫路文博氏と中学・高校の西尾直之監督、数枚中京コナともどもに協力し合って指導する。

湯元さんは、日本レスリング協会医科委員として五輪選手を多数指導した大学レスリング部の近藤衣美スポーツ科学部講師（本スポーツ栄誉賞）の存在を高評価する。「体重制限を伴う競技であり、栄誉の知識は重要。中学・高校段階から学べるのは大きい」と語っている。

水上競技部

# 男女14種目で表彰台 1年・松山 孝50m自由形V、メダル5個



井上輝星（体育3年、福井工業大学附属福井）



松山優杏（スポーツ科学1年、兵庫・神戸野田）



吉本早希（スポーツ科学2年、和歌山・笠田）



和田晃太郎（スポーツ科学2年、大阪・太成学院大学）



宗石星流（体育4年、高知商業）



高野朱理（スポーツ科学1年、富山・高岡第一）



麻中大輝（体育3年、大阪・常翔学園）

**関西学生チャンピオンシップ水泳競技大会**  
第13回関西学生チャンピオンシップ水泳競技大会が、6月14、15日、大阪市のAsue大阪プールで開かれ、松山優杏（スポーツ科学1年、兵庫・神戸野田）が女子50m自由形で優勝した。井上輝星（体育3年・福井工業大学附属福井）が男子200m個人メドレーで2位になるなど、6種目で2位、7種目で3位と、男女合わせて14種目で表彰台に立った。

**女子**  
松山が初日の50m自由形で26秒14を記録し、優勝を収めた。予選のタイムは、高松のチームメイトである武庫川女子大学の選手に絶対的優勢と、気持ちを入れ替えて臨んだという。レース開始からハイペースで飛ばし、最後まで粘って優勝した。2日目の100m自由形でも58秒01で3位。リレーでは4×100mフリーリレーで2位、4×100mメドレーリレーで3位、4×200mフリーリレーで3位と出場した全のリレーでチームの勝利に貢献し、5種目で表彰台に立った。

100m平泳ぎでは吉本早希（スポーツ科学2年、和歌山・笠田）が1分10秒78で2位、4×100mメドレーリレーで3位、200m個人メドレーでは高野朱理（スポーツ科学1年、富山・高岡第一）が自己ベストタイムの2分20秒76で3位に輝き、4×100mフリーリレーで2位、4×200mフリーリレーでも3位となった。

このほか、4年生の井上紗奈（体育4年、愛媛・新田）をはじめ、岸本明音（教育2年、滋賀・大津）、入江美尋（スポーツ科学1年、大阪・太成学院大学）もリレーで活躍した。

**男子**  
男子では、井上輝星（体育3年、福井工業大学附属福井）が200m個人メドレーで自己ベストタイムの2分5秒00を記録し、2位、井上ほり（リレー）でも活躍し、4×100mフリーリレーで3位、4×200mフリーリレーでも2位となった。

400m個人メドレーでは和田晃太郎（スポーツ科学2年、大阪・太成学院大学）が4分26秒21で2位に輝いた。和山は4×200mフリーリレーでも3番手で出場し、2位となった。

1500m自由形では麻中大輝（体育3年、大阪・常翔学園）が16分20秒95で3位、100m平泳ぎでは宗石星流（体育4年、高知商業）が1分10秒76で3位となった。このほか、田中拓紀（体育4年、岩手・盛岡北）、上田陽輝（スポーツ科学2年、大阪・向陽台）のほか、1年生の伊藤大智（スポーツ科学、秋田・御所野学院）、戸倉悠太（同、和歌山・紀北工業）、佐々木玲伍（同、岩手・盛岡南）、登飛瑛（教育、兵庫・報徳学園）もリレーで重要な役割を担った。

川島康弘部長は大会後、選手に「全日本インカレは4日間の競技日程となり、今大会よりハードな日程になる。この程度で疲れた表情を見せず、乗り越えられるようタフになってほしい」と激励を飛ばしていた。



4×200mフリーリレー 男子2位、女子6位

## 本戦に単複14選手進出 インカレは出場逃す



片山稜太（体育4年、岡山理科大学附属、右）

**男子**  
テニス部男子は関西学生春季トーナメントの本戦にシングルス7人、ダブルス3組の計14選手が進出した。富地弘太郎監督は「14人が本戦に勝ち上がったのは初めてではないか」と話した。

しかし、本戦の試合は苦戦した。シングルスでは、垣内勇星（体育4年、山口・西京）、平山凛太郎（体育3年、鹿児島）、島本晃（体育3年、鹿児島）は初戦で敗れた。ダブルスは、羽田龍也（体育4年、大阪・清風）、渡邊大樹（同）と、和歌山・初芝橋本）組、村上葵（体育3年、福岡・柳川）組、下林海翔（同、清風）組が1勝、他の3組は初戦で敗れた。全員が全日本インカレ出場を逃がし、富地監督は「インカレは久しぶり。取れる試合を落とす場面が多かった」と振り返る。

地力のある選手は多い。左利きの片山稜太（体育4年、岡山理科大学附属）は粘り強さが際立ち、ダブルスで1年がらメンバーだった垣内はシングルスでも安定感を増した。平山はストロークが安定し、主将の寺崎呼人（体育4年、徳島・城東）も粘り強い。また、1年生の廣本陽菜（スポーツ科学、広島国際学院）が本戦に出場したのも明るい材料だ。

9月の関西大学対抗リーグは、昨年は一部で全敗し、入替戦で勝った。今年は4位が目標だ。富地監督は「昨年はエースの力が抜けていたが、選手層の厚さは今年が上と見る。厳しい残暑の中で連戦を乗り切る体力強化も含め、練習に励んでいる」。



濱岸恵（スポーツ科学2年、宮崎日本大学、右）

## 単複4人がインカレへ 努力実り成果出す選手も多く

**女子**  
テニス部女子は関西学生春季トーナメントでシングルス5人、ダブルス3組が本戦出場。うち8月の全日本インカレに、シングルスで濱岸恵（スポーツ科学2年、宮崎日本大学）、岡村凛那（同、鹿児島・鳳凰）が1勝して予選出場。ダブルスで4強の岡村・濱岸組、8強で代表決定戦に勝った川西由芽（体育4年、大阪・浪速）・紀之定寿佳（スポーツ科学2年、愛媛・清見）組が本戦出場を果たした。

濱岸は小柄だが、よく動くオールラウンダー。1年間、フィジカルトレーニングを磨いた成果が出て、2回戦では第3シードの選手をファイナルセットまで追い詰めた。岡村は昨年度の関西学生連盟最優秀新人賞を受賞した逸材で、第2シードで臨んだが、プレッシャーもあって地力を発揮できず、インカレは雪辱の場となる。

川西・紀之組は、攻撃的な紀之がサーブで崩しフォアを3年かけて鍛えて逆に武器にするなど地道な練習が成績に結び付いた。

シングルスの上村倫実（体育4年、大阪・桜宮）、ダブルスの大塚地佐奈（同、広島・安田女子）も3年間の努力が実って初めて春季トーナメントの本戦に進むなど、それぞれが力を発揮している。岡村監督は「昨年、力のあった1年生たちが入学してチームの雰囲気はさらによくなり、みんなが当たり前のようにならざるを得ない状況に。インカレではシングルス2人はまず予選突破を、ダブルスは8強以上を目指してほしい」と期待している。

### V 西村が女子エリート2連覇

ジャパンカップBMXレーシング2025

全日本選手権と並びBMXレーシングの日本のトップを決める「ジャパンカップBMXレーシング2025」が5月25日、開催され、DASH選抜アスリートの西村寧々花（体育3年、大阪体育大学浪商）が女子エリート大会2連覇を達成した。同じくDASH選抜アスリートの増田優一（大学院博士前期課程）は男子エリート2位となった。

この大会は世界選手権（8月、デンマーク）出場選手の選考兼ね、西村、増田は代表への選出が期待されている。西村は「大金星は雨でコースのコンディションが悪いもの、練習拠点にしているコースなので問題なく対応することができた。これから大きな大会が続くので、現在のフィジカルと海外での経験が活かせるようにしたい」と語っている。

### 増田は男子エリート2位

西村寧々花（体育3年、大阪体育大学浪商）

増田優一（大学院博士前期課程）

# Sportsnavi

## スポーツナビ大阪体育大学公式情報

大阪体育大学の各クラブの活躍は、スポーツナビの本学公式情報で記事、写真を掲載し、広く社会に向けて情報発信しています。こちらのQRコードからご覧になれます。



# 新城値千金ヘッドで5季ぶりV リーグ最少失点の堅守光る

関西学生女子サッカー春季リーグ



サッカー部女子は関西学生女子春季リーグ最終節の6月22日、追手門学院大学と1-1で引き分け、通算6勝1分け0敗、勝ち点19で、2022年秋以来5シーズンぶりの優勝を果たした。



ヘディングゴールを決める新城(背番号5)

**女子** それまで6戦全勝だった大体系は、前半は優勢に試合を進めながらゴールを決められず、0-0で折り返した。後半25分、コーナーキックからDFの新城琴美(スポーツ科学3年、岡山県作陽)がヘディングでゴールを決めて先制。新城は春先



川浪実歩(体育4年、鹿児島・神村学園)

チームは、4年生は全員で5人、フレイヤーは4人だけで全学年で戦った。センターバックとして守備を統率してきた清悠香(体育4年、徳島・鳴門渦潮)らが大体系の

宿願として教育実習で抜ける中、東海里(体育3年、大阪桐蔭)がセンターバックの穴を埋めた。絶対的なストライカーはいなくても、橋本結菜(体育3年、同)、矢野紗也佳(スポーツ科学3年、同)、北原歩奈(体育3年、山梨・日本航空)が3得点。リーグ最少の失点の堅いディフェンスが優勝の決め手となった。



## サッカー部

### 「個に頼らずチームで戦う」 1、2年生台頭に手応え

関西学生サッカーリーグ



佐野寛(体育4年、広島瀬戸内)

サッカー部男子は第103回関西学生リーグで、6月末時点で3勝2敗5分け、勝ち点14で6位につけている。

松尾元太監督は「内容面での成長が徐々にみられている点で、順位以上にポジティブにとらえている」と戦いぶりを評価する。

**男子** 古山兼悟(セレンソンの力に頼らず、全員が同じ方向を向いてチームとして戦える集団を目指しているが、2



佐藤陽成(体育4年、北海道・サドレ札幌U18)



白田那(スポーツ科学3年、秋田・クレスミア大附校)



三島崇人(スポーツ科学3年、島根・立正大学)

で初黒星を喫し、続く同志社大学戦でも連敗したが、その後の阪南大学戦で佐野寛

がPKを決めて1-0で勝ち、立て直した。主将の佐藤陽成(体育4年、北海道・サドレ札幌U18)は対人の強さが持ち味で、札幌への入団が内定している。また、三島はがで離脱したが、非常に高いポテンシャルがあり、近い将来、関西を代表する選手としての活躍が期待される。



大塚(体育4年、奈良・東海)ボール保持のトライ



ステイワン

林哲太(体育4年、愛媛・松山聖徳)



丸本正真(スポーツ科学3年、大阪・都島工業)

## ラグビー部

関西大学ラグビー春季トーナメント

ラグビー部は5、6月の関西大学春季トーナメントで10位。初戦の摂南大学(昨季Aリーグ7位)に26-31で敗れて敗者戦に回り、環太平洋大学に54-13で勝利。最終戦で龍谷大学(Bリーグ2位)に22-43で敗れた。

関大リーグでは、前半9分、6トライを許し、大差が広がった。主将のC.B.羽田賢(松山聖徳)が先制トライ。林信(体育4年、京都工芸)は後半にもトライを挙げた。副主将のS.H.山本波琉(同、丸本正真)がスポーツ科学3年、大阪・都島工業

東海大学付属大阪仰光が教育実習のため不在で、ロングナター・コロ(体育3年、青森山田)は補欠で欠場した。だが、長崎正監督は「教育実習と重なる時期に勝ち切ることを目標に、体大の伝統、目標のレベル5(関西5位レベル)に到達させてやれなかったのは監督の責任」と話した。



森西貴太(スポーツ科学3年、兵庫・科大)

### 目標の「レベル5」ならず 秋のA昇格向けスクラム磨く

# インカレ無念の準優勝 春の高知大会

硬式野球部  
女子

全日本大学女子硬式野球選手権高知大会

硬式野球部女子は5月に高知県安芸市

宮球場などで行われた第11回全日本大学  
選手権高知大会で、仙台大学に2-3で  
敗れ、全日本インカレ高知大会としては  
初となる優勝をあと一步で逃した。

## 夏の和歌山大会で雪辱を



山本二花（体育4年、大阪・麗正社）



谷依（教育1年、京大・大西）



菅川莉子（体育3年、鹿児島・神村学園）

しかし、打線はつながりに  
16年の歴史で「過去一番と  
いう強打線に大会に臨んでい



木村睦実（体育4年、京都・同志）



柏崎咲和（体育4年、福井工業大学附属福井）

大体大は一回に2点を先行  
され、一回裏に5番・木村睦  
実（体育4年、京都同志）の  
タイムリーで1点を返し、四  
回も木村の二塁打を起死に失  
策の同点とした。しかし、五  
回に勝ち越し、準決勝で完  
投したエース・柏崎咲和（体  
育4年、福井工業大学附属福  
井）が連投で六・七回を抑え  
たが、あと一本が出なかった。  
横井光治監督は「優勝しか  
見いかなかった」と悔やむ。  
創部3年目の仙台大にはこれ  
まで毎年対戦して負けたこ  
が、予選リーグでも2  
0で勝った。また、創部  
16年の歴史で「過去一番と  
いう強打線に大会に臨んでい

# 北尾、齋藤ベストナイン 開幕連敗響き4位

硬式野球部  
男子

阪神大学野球春季リーグ

硬式野球部男子は4、5月の阪  
神大学野球春季リーグでは4勝6  
敗、12ポイントで4位。昨春の3  
位、昨秋の2位から順位を下げた。



北尾太一（体育3年、兵庫・須磨学園）



石見輔（体育4年、高知・大谷）



齋藤也（体育4年、岡山・玉野光南）

初戦の大阪産業大学戦は4  
失策が出て、2戦目0-0の  
タイブレークから失策サ  
ヨナラ負け。スタートつま  
ずき、松平一彦監督は「苦し  
いリーグ戦だった」と振り返  
る。  
投手陣は、先発の柱として  
期待した最速147の高田  
純誠（体育3年、兵庫・報  
徳学園）、林勝宏（体育4年、  
北海道駒澤大学附属苫小牧）  
の調子が上がらず、チーム  
の調子はリーグワーストの  
4.48だった。  
その中で奮闘したが、北  
尾太一（体育3年、兵庫・須  
磨学園）多彩な変化球を制  
球率46.7%に集めて、チーム  
全10試合中9試合で救援し、  
20イニング14奪三振で、リ  
グ最多タイ、チームの全勝利  
となる4勝。防御率はリーグ  
トップの0.90でベストナイン  
に輝いた。また、高木太陽  
（体育4年、徳島・城東も  
140イニングの速球で好投した  
打線は、打率2割3分9厘  
にひまり、3盗塁と機動力  
を發揮できなかったが、齋藤  
智也（体育4年、岡山・玉野  
光南）が打率3割3分3厘の  
打撃と三塁の安定した守りで  
ベストナインに。チーム一の  
長打力がある石見輔（体育  
4年、京都・大谷）が公式戦  
初レギュラーで4番を務め、  
1番の山本樹紀（体育4年、  
和歌山・星林）が打率3割6  
分8厘を残すなど明るい材料  
もある。  
教員・公務員をめざす学  
生が多い大体大の宿命とし  
て、春で引退する4年生も多  
いが、2019年春を最後に  
遠ざかった優勝を秋にかけろ  
う。春は多岐な投打の柱  
高田と平子真弘（体育4年、  
日本航空）の復調がその  
力を握る。